

学 会 う ら 話

多賀 光彦

日本分析化学会が発足したのは1952年、私は大学3年であり、教授の薦めで入会した。会員証には「会員番号44、退会するまで変わりません」と書かれていたが・・・。5年後の1957年に北海道支部（全国5番目）が設立され、初代支部長太秦康光先生によって基礎が築かれた。1962年（設立5年目）には第11年会が、1967年（設立10年目）には日化との共催で分析化学討論会が札幌で開かれている。その後、年会は札幌、討論会は札幌以外、当地幹事主体で開催するようになった。北海道支部は全国7支部の中で最も会員数が少ない（会員4%）弱小支部であるが、事業として夏季、冬季支部研究発表会が日化支部と共催（夏は日化、冬は分化主体）で開催されるほか、化学教育（日化と共催）、講習会、講演会、出版、セミナーなど着々と数を増し、現在に引き継がれている。各事業は委員長制がとられ、幹事全員で分担協力する体制が整っている。支部のモットー“粉骨砕身、滅私奉公”は支部創生期に生まれたものである。以下に、支部創設から50年、支部で行われた学会における‘うら話’について思い出すまま、記憶をたどってみることにする。

(1) 年 会

支部で2回目となる第18年会（1969）は神原支部長が実行委員長をかねて実施された。私にとって最初の実行委員である。当初予定していた北大教養部が学園紛争で占拠され、急きょ北海道工業大学をお借りするという波乱の出だしであった。

旅籠の客引き：学会参加者から宿泊の依頼があると、希望に応じていちいちホテルをまわり部屋の確保をするのが吉田、多賀の最初の仕事であった。学会終了後、依頼したホテルから「1泊で他へ移った」、「待っていたが来館しなかった」などの苦情がかなりあり、平身低頭して謝ってまわり、違約金もご容赦願ったことが思い出される。以降これに懲りて航空券やホテルの予約など一切旅行会社に任せる方法がとられるようになった。

国際交流？：懇親会は学会につきものである。18年会では、恐らく全国でも初めての試みと思われるが、太秦名誉会員をはじめ、神原委員長、各実行委員のご夫人が招集された。20名近くの前装したご夫人が加わり会場は華やかに国際会議のような雰囲気に入れられ、他支部の先生方からも好評であった。「コンパニオンの経費削減」「国際（酷妻）交流」などの声も聞こえたが、平素母子家庭を嘆いていたご夫人方の評判は上々で、以後しばらく支部大会などでも続けられていた。

見学会リハーサル：恒例の見学観光旅行会は各支部とも特徴のある企画がなされていた。今回、北海道で初めての見学観光旅行会であり、参加者からの期待も大きいと聞かされた。係を任された吉田、多賀はその期待に応えるべく、白銀温泉を宿泊地とするコースを選んだ。バス会社と行程の打ち合わせの際、バス旅行ではガイドの出来不出来が大きいと考え、ガイドの同席を依頼した。思惑が図にあたりベテランガイド嬢の助言で途中の見所、休憩地点、昼食とおやつ、それらの手配先など事細かに、しかもスムーズに決めることができた。先輩諸兄の陰口「吉田、多賀お二人でガイド嬢の面接試験をしたそうだ」。

コースが決まると、本番前に実際に辿って検証しようと、土日をかけて中古自家用車で

出発した。予定表に合わせて時間を計りながら、見学先の三井東圧を皮切りに休憩地、昼食の差し入れなどを確認しながら、育成牧場（牛乳とジャガイモの手配）、それを受け取る手筈の確認をすませ、十勝岳望岳台を経て白銀温泉望岳荘に時間通り到着した。部屋割り、料理などについて、美瑛町から上ってきた宴会のサービス係も交えて打ち合わせをすませる。温泉の湯加減を検証した後、宴会のリハーサル開始、ビールの冷え具合も上々であった。参加者は酒豪揃いと聞いているが、朝起きて空瓶を並べ、ひけはとらないぞ！帰路の見所を確認、滝川で昼食のジンギスカンの味を確かめ、時間通り無事帰札した。

本番はリハーサル通りスムーズに進行した。後日「バスの中で配られた枝付き枝豆、トウキビ、十勝岳望岳台で山を見上げながら、ほかほかのジャガイモと大きなヤカンから注がれた熱い牛乳の味、そこで作った雪玉など、北海道の味覚と眺望を満喫し感激でした。」とお礼のことばを頂戴した。10月初めというのに展望台では早くも雪がちらつき、日陰には僅かながら積雪も見られた。

臨時ガイド：24年会（梶目清一郎委員長）も見学会係を仰せつかり、前回の経験から計画のみで旅行会社に丸投げ？当日朝参加者全員遅刻もなくバスに乗り込んだが、肝心のガイドが現れない。急病で代わりを探して余市で追いつくと連絡が入り、やむなく予定をかなり遅れて出発した。突然私が臨時ガイドに命ぜられ、余市までの小1時間何を案内したのか全く覚えていない。幸いニッカ工場で正規のガイド嬢にバトンタッチ、彼女は勤めを既に辞めていたのに突然呼び出されたとのこと。以後特に2日目は大雨で景色もよく見えないなか退屈もせず楽しく終了、ガイド嬢の評判も上々であったが、面接試験が必要であったのかもしれない。

一円に泣いた金庫番：31年会（青村和夫委員長）では会計を預かり、公務終了後、総務担当の吉田君と青村教授室に集まり、年会の間近には週に数度夜遅くまで協議を重ねた。何時も飲み物やつまみが用意されていてエンジンは常に全開であった。終了後つい二次会、あげくのはてに青さん宅まで、ということも屢々であった。几帳面な委員長のもとで金庫番は教育されたのかもしれない。

37年会（吉田仁志委員長）で私は前回に引き続き会計を引き受けた。その当時は国税局の目が学会の経理にも厳しくなりはじめた時代であり、本部はピリピリしていて今までにないことであるが、年会の会計にも監査が入ることになった。帳簿は項目ごとに区分けし、膨大な領収書も同様にファイルした。公認会計士来札の前日、帳簿と領収書の金額が1円合わずに深夜まで四苦八苦したことが思い出される。以後の年会で会計監査の入ったという話しは聞いていない。

(2) 討論会、支部研究発表会

北見メルシャンパーティー：1974支部研究発表会、北見（佐々木満雄委員長）では、化学教育研究協議会（伊藤翼委員長）も同時開催された。会場など佐々木先生におまかせし、札幌の幹事の宿泊も工大のゲストハウスに準備されていた。本番前日の札幌発網走行き最終列車には、期せずして札幌の参加者が集中した。発車と同時にあちこちで缶ビールの栓が抜かれ、話が弾んでいた。車内販売が通るたびにビールは順調に消費され、ついに品切

れ、乗客の少ないこの時期珍しく、途中の停車駅で緊急に補充したと聞く。皆いい気分で北見駅に下車したが、ややあって神原先生が居られない。網走まで足をのばされた？とにかくゲストハウスに入り飲みながら待つことにした。ややあって先生網走からタクシーを飛ばして無事御到着、全員揃ったところで改めてメルシャンワインで乾杯！夜毎繰り広げられたメルシャンパーティーの第1日目である。佐々木委員長による学会は第39回討論会、支部研発、化学教育など数多く行われ、いずれも思い出に残るものであった。

深慮遠謀：52回討論会帯広1991（根岸孝委員長）は私にとって討論会で直接実行委員として深く関わった思い出に残るものである。話しは十数年前に遡るが、1970年代半ば帯広畜大から夏休みに実施する集中講義の依頼があり、少しでもお役に立てばと思いお引き受けすることにした。帯広畜大には分析化学会の会員がいないので、これを機会に会員拡充を目論見、講義の窓口であった近堂裕弘、根岸孝両教授に入会と、さらに幹事もお願いした。1985~6年頃と記憶しているが、帯広で開かれた化学講演会の講師を依頼されたおり、根岸教授も講師として参加されて、図らずも同席し親しく話す機会をえた。講演会終了後の懇親会で、話しが弾むなか、生年月日が同じであることが分かった。では時間は？共に知るすべはなかった。「双子かもしれない」と言うと、即座に「気持ち悪い！」と返ってきて、顔を見合わせて爆笑。このときふと‘次回討論会の開催地は帯広’と脳裏をかすめた。その機会はすぐ訪れることになる。

1989年、私が2度目の理事を仰せつかったおり、理事会で「1991年討論会は北海道の順番なのでよろしく」との要請があった。直ちに秋の支部幹事会に諮り、帯広にお願いしたいと提案した。根岸先生は畜産系の小さな大学で分析の会員もごく少ないので無理であると固辞されたが、会場の設営やアルバイトなど現地の準備以外は札幌の委員がすべて行うということで半ば強引に説得し内諾を取り付けた。1991年には討論会に引き続き ICAS '91 の開催が決まっており、研究発表の多くがそちらに流れ、討論会の講演数が減るのではないかと危惧も大きかったが、とにかく努力するしかない。当時私は ICAS '91 の実行委員と Anal. Sci. の編集委員を勤めていたので、折に触れて極力 PR に努めることにした。

1990年4月に準備委員会（根岸委員長）が発足した。同年5月には那須義和理事、高取健彦支部長と私の3人で畜大を訪れ、坂村学長へご挨拶と会場提供のお礼を述べ、学長から全面協力するとの力強いお言葉を頂戴した。委員長の案内で講義室や講堂など学内を拝見した後、委員長が懇親会、授賞式会場の候補にあげられていた、池田町町営のワイン城、イベント会場、まきばの家を順次見て回った結果、全員一致で「まきばの家」で授賞式、懇親会を実施することが決まった。その場所は市街地からやや離れた小高い丘にあり、ビニールで囲っただけのバーベキュー用の小屋で、野外にも多くの席がある。委員長の構想は、最初に授賞式を行い、焼き肉、十勝ワインを主体にしたパーティー、小屋の外では「牛の丸焼き」の実演を行い、雄大な十勝平野を眼下に眺めながらの野趣あふれる懇親会にすることで、全員意義無く用意万端お願いすることになった。同年10月実行委員会に切り替わり本格的活動に入る。

1991年討論会本番の成果については35周年記念誌に根岸委員長の記録が掲載されている。

懇親会は委員長の構想通りに進行した。十勝平野を見下ろしながら、十勝ワインを飲み、朝早くからゆっくりと焼き上げた牛の丸焼きに参加者の人気が集まった。委員長の努力によりワインはすべて町のサービスであり、破格の速度で消費量も予想をはるかに上まわるものであったと聞く。やがて十勝平野に黄昏れが訪れる頃、赤く燃えた空を静かに眺める人、草原をはしゃぎ、走りまわる人、宴は暗くなるまで続き、後ろ髪を引かれる思いでバスに乗り帯広へ戻った。なお、後日の見学会にも大量のワインが積み込まれ、阿寒湖畔での2次会も大いに盛り上がったことが思い出される。

(3) 終 局

1992年は私にとって北大最後の年度であり、討論会を終えてもう学会に直接係わることはないと思っていたが、水池敦会長の下で副会長に選出され、最後まで学会に係わるができること有り難くお受けした。5月には第53回討論会に参加のため秋田へ、根岸先生も晴れ晴れとした顔で参加されていた。懇親会では帯広のお礼を頂戴した。また最後に各支部代表による「なまはげ」の乱舞に加えさせていただき、見学会ではきれいな標準語を話していたガイド嬢が突然秋田方言に変身するのを大いに楽しんだ。最近は見学会が次第に影を潜めるようになってきたのは、世の移り変わりか。

退官して13年余、この間北海道支部で年会、討論会はそれぞれ2回ずつ開催され、その都度参加して新しい分析化学の雰囲気につれ、古い友人との再会を楽しんでいる。3年後には年会が開かれる、楽しみに開催を見守りたいと思っている。最後に分析化学会、同北海道支部のますますの発展を祈念して筆をおくこととします。

(北海道大学名誉教授)